
サイン

あきざくら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

サイン

【Nコード】

N6512C

【作者名】

あきざくら

【あらすじ】

新一が黒の組織を壊滅させ、元の身体に戻ってから3ヶ月……。新一は未だに蘭に思いを告げられずにいた。物書き初心者につき、評価・批評をお願いします。《あらすじ訂正；9月11日》

第一話

「蘭に彼氏ができたあ!？」

登校して来た生徒達の談笑でざわつく教室内。窓側の一番後ろのにある席について、推理小説を読んでいた新一は突拍子もない声をあげた。

黒の組織を壊滅させ、元の身体を取り戻してから早3ヶ月。事件の後処理がようやく片付いて来た今日この頃。でも、探偵業が忙しい今日この頃。信じたくない話に新一は自分の耳を疑った。

「ちょっと、声がデカすぎるわよ新一君」

空いた口が塞がらず、読んでいた推理小説を持ったまま呆然としている新一の耳元で、園子は小声で話しかけた。

「まだ蘭本人に聞いてないから本当の事はわからないんだけど、昨日C組の斉藤君が放課後に学校の体育館裏で誰かに告げられている蘭を見たんだって。はっきりと話声は聞こえなかったらしいんだけど、その雰囲気から、どうやら蘭が告白にOKしたような感じだったって……」

新一君は何か聞いてないの？」

園子は蘭の幼なじみで学校では蘭の旦那と呼ばれている新一に尋ねた。

本人たちはただの幼なじみだと言い張り、完全否定しているが、新一と蘭の夫婦っぷりはとても有名で、毎日一緒に登下校するわ、毎日のように痴話ゲンカはするわで……。極めつけは新一の弁当を

蘭が毎日作っているときたら、これは何もないと思うほうがおかしい。

「ちょっと新一君まじめに聞いてた？」

「あ、ああ」

「もう！ 蘭の一大事なのよ？ しっかりしてよね」

「……わるかったな」

新一は行き場のない気持ちのかたまりを無理矢理しずめて、平静を装おうとした。しかし、自分の意思に反して大きく速く鼓動する心臓のせいで、推理小説を持つ手が小刻みに震えてしまう。新一は唇をかみ締めた。

「おうどうした鈴木？」

「工藤、鈴木も”一応”女の子なんだから、イジメたらいかんぞ？」

先ほどの新一の大きな声でタダ事ではないと思ったクラスメイトが、なんだなんだと集まり始めた。新一の席の回りに黒山の人だかりができる。

「北原、み、みんな！？ いやーちょっとねえ……ってか北原！

”一応”は余計よ！」

「ははっ！ わりーわりー」

北原は食って掛かる園子に向かって、ニシシと笑った。健康的に焼けた褐色の肌に、白い歯が際立つ。

彼の名前は北原紀之。

彼は、小学校から新一や蘭、園子と一緒にの学校に通っていて、新一の親友だ。サッカーが好きで、今は帝丹高校のエースを勤めている。新一がサッカーをしていた中学校では、新一と北原の二人の息

はピッタリで、得点のほとんどをこの二人が稼いでいた。そのためこの二人は”最強の2トップ”と称され、帝丹中学サッカー部の黄金時代を築いた。

「そういえば、工藤、今日奥さんは一緒じゃないのか？」

その北原が、腕を組み静かに目を閉じている新一に素朴な疑問を問かけた。いつも一緒に登校して来ているはずの蘭の姿が見えない事を不審に思ったからだ。

「……今日は空手の朝練があるからって、いつもより早く学校に行つたみたいだぜ？」

俺はそれ以外の事は何も聞いてない……と、静かに答えた。

「そっかー。新一君は何も知らないか。じゃあ、事実確認は蘭が朝練が終わって教室に戻って来るまでできないわね。昨日の時点で本当かどうか確かめたかったんだけど、斉藤君からこの話を聞いたのが夜遅くて、連絡とれなかったのよ」

「園子も蘭から何も聞かされてないんだな」

「そうなのよ！ 蘭ったら大親友の私に何も相談がないのよ！？……だから、昨日蘭を見たって言うC組の斉藤君の話は、ただの間違いか、噂かのどっちかだと思うんだけど、どう思う？」

「ちょっと待った、お前ら何の話をしてるんだ？ 全然内容が見えてこないぞ」

頭にクエスチョンマークを浮かべた北原が2人の話に割って入った。

「そうだそうだ！ と群がっているクラスメイトも口々にヤジを飛

ばす。

その時。

「おい！ 工藤っ！ みんな！ 大事件だぞっ！」
クラスメイトの青島が、ドアが壊れんばかりの勢いで飛び込んできた。

突然の出来事に、一斉にその人物を注目する。

「も、ももも毛利が、男と、一緒に、歩い、てたっ……！」

そこで一旦呼吸を置き、呆然と見つめてくるクラスメイトに決定的な言葉を浴びせた。

「それから、今度の、休みに、デートする約束も、してたぞ！」

「「「ええええええっ！！」」」

第一話（後書き）

ご愛読ありがとうございます。

初の連載小説です。

小説は勉強中の身ですので、おかしいところが多々ございますが、
気がついたらご指摘いただけると幸いです。

2話目もよろしくお願い致します。

第二話

「それじゃあ、また放課後ね、遠藤君」

「ああ、ありがとな毛利」

「こちらこそ、ありがとう」

蘭は、教室の前まで送ってくれた遠藤に微笑みかけ、踵を返して戻って行く彼を見送る。そして一息ついてから教室内に入ろうと、身体の向きを変えた。

『じゃあ、またねえー 遠藤くうーん』

『ありがとなっ！ 毛利……。だってー！ 見たか？ おまえらっ！？』

クラスの漫才コンビと言われている、山田と池田がおちやらけた口調で、ほんの数秒前のやり取りを再現する。

そして弾かれたように湧き上がる歓喜の声。

教室内に入ろうとした瞬間の出来事に、蘭の足はその場で止まった。

「見た見た！」

「ヒューヒュー！」

「バッチシ見せて頂きましたぜ！」

「証拠写真もゲッチュ！」

「おっしやっあー！！ じゃあ、明日の帝丹新聞のトップはこの話題に決まりだっ！」

「いや!! 明日まで待てない!! 今すぐに号外の発行だっ!!」

てんやわんやのお祭り騒ぎだ。

奇声を発する者あり、先ほどのやり取りを再現する者あり、手をたたく者あり、

ハイタッチする者あり、歌いだす者あり、泣き出す者あり、写メを送りまくる者あり、踊りだす者あり：etc

みんな一緒に騒ごうぜっ! 一度きりしかない今この青春の時でしか味わえない、唯一の味。熟しきってない、青くみずみずしい甘酸っぱさ。泣くのも、笑うのもそのひと次第。

今やらなくては、いつやる? 夢への扉は目の前だ! さあ、君も来るんだ、青春のネバーランドへっ!!

「……らん!!」

「蘭っ!!」

「……あっ」

もはやお祭り騒ぎで手のつけようもないクラスメイトを呆然と眺めていた蘭は、園子の声でようやく我にかえる。

「蘭、もうアンタって子は、あのねえ、どういうつもり? わかっているの? もうっ! 言いたいこといっぱいありすぎて訳わかんないわっ!! 一つひとつ、わかるように説明してもらいますからね!!」

「園子……みんなどうしたの? 何かあったの?」

蘭はポケーンと答える。

「なにかあったの? って……もうっ!!」

蘭ののほほんとした答えに園子は頭をガシガシと掻いた。

なにかあったなんて私が聞きたいくらいよっ! アンタは天然よ! 天然バカよっ!! そしてウチのクラスメイトはお祭りバカよ

!!

園子は、苛立つ気持ちを抑えきれず、蘭をキッと睨みつけた。

「アンタ、自分が何をしたのか、わかってんの!？」

「なにをしたって……教室に入ろうとしたら、みんなの様子がおかしくて……」

「その前っ!!」

園子は片眉を吊り上げた。

「その前は……あっ」

そこまで言っただけで、思い当たる節にたどり着いた蘭は、申し分けないという表情で園子を見つめた。

「どういうつもりか、あとで、きちんと説明」

「……はい、ごめんなさい」

「よろしい」

“きちんと説明”というところを強調して有無をも言わせないという態度の園子に、蘭はに大人しく従った。そしてうつむき、片手に持っていたカバンを握り締める。

そういえば、あの子にメールしなきゃ

蘭はカバンから携帯電話を取り出し、自分の席に着こうと辺りを見回した。すると、一つの冴えた視線とぶつかる。

その視線の主は、今朝は朝練のために一緒に登校してこなかった幼馴染の彼——工藤新一——

蘭は真っ直ぐに新一の瞳を見つめた。時が一瞬だけ止まり、世界にはこの二人だけしかないような感覚になる。

新一は何か言おうと口を開きかけた。しかし、新一はその視線に絶えられなくなったように目をそらした。言おうとした言葉も、心の奥底へと飲み込んだ。

そして机の上に伏せてあった推理小説を静かに読み始めた。

「おいお前ら〜H R始めっぞ」

クラス担任が教室の中に入って来ると、それを合図に一斉にクラスメイトが席に着く。

蘭の席は教室の一番後ろの窓側から数えて二番目。新一の隣の席。

二人の周り是不穏な空気に包まれた。

第三話

「つかさ、工藤、お前このままでいいのか？」

午前中の授業の終わりを告げるチャイムが鳴り、一斉に賑わいを取り戻した校内。購買へお昼ご飯争奪戦に向かう生徒で廊下は埋めつくされ、教室内には数人の生徒しか残っていない。そんな中、新一は机の上の教科書やらノートやらをゆっくりと片付けていた。そこへクラスメイトの北原が近寄ってきた。

「旦那なら、なにかする事あるんじゃないのか？」

「なにして何をだ？」

「ってか、旦那じゃねえよと、新一は不機嫌そうな顔で話しかけてきたヤツを迎える。

「あのな？ 仮にも毛利はお前の奥さんだろ？ 他の男と付き合っているでもいいのか？」

そう言いながら、北原は新一の前の席の椅子に逆向きに腰かけた。「俺達は夫婦じゃない」

どっかりと座って話込む事を決めたらしいクラスメイトに、新一は不快感をあらわにした。

「じゃあ、恋人！」

「付き合ってもない」

「も、もしや……あ、愛人！？」

「バーロ、んなワケあるかっ！！ 飛躍し過ぎだろ！！」

バカな事を言う親友に思わず突っ込みを入れる。ここで『昼ドラか！』と突っ込めば”タカア○ドトシ”になったのだが。

はあ、と、新一は顔に手をやり、わざと盛大なため息をついた。あまり、触れてほしくない話題だな……

新一は指の隙間から北原に目をやった。すると、もうお手上げと
いったふうに天井を仰いでいる北原が写った。

「じゃあ、なんなんだよ……」

北原に泣きが入る。

「ただの……。ただの幼なじみだよ」

新一がポツリと言った。

その台詞に北原は顔を元に戻すと、窓の外の遠くに視線をやって
いる新一が写った。その表情は、どこか寂しげで、切なそうだ。

「でもよ、幼なじみでも、好きなんだろ？ 毛利のこと」

コンビニ弁当を机の上に広げながら北原は言った。ズバリ、核
心的なことを聞く。

「つたりめーだろ」

野暮な事聞くなよ、という新一の声は聞き取れないほどに小さい
ものだったが、ようやく聞けた新一の素直な返事に、北原の表情は
和らいだ。新一とは小学校からの長い付き合いになる。この台詞が
出るまで、どれだけの時間がかかったことか。今までなら、蘭への
恋心さえも完全に否定していたくらいだったから。

へえ……と、北原は静かに笑みを漏らした。

「珍しく素直な返事じゃねえか。ようやく認めたか？」

「悪いかよ」

「いいんじゃない？ 人間素直が一番さ」

パキンと、北原はわりばしを割り、鶏の唐揚げを摘んで、口の中
に放り込んだ。しっかりと咀嚼して飲み込む。

そんな様子を見て新一もカバンから弁当を取り出した。よく見慣
れた、ピンクの花柄のふろ敷に包まれた弁当。しばらくじっと見つ
め、それからゆっくり固い結び目を解いていった。

「その弁当……今日も奥さんの手作りか!？」

北原は驚いたように言う。

「……ったく、蘭のやつどういうつもりなんだか」

「彼氏が出来ても、弁当だけは作ってくれるんだな」

「みたいだな」

「……気持ち察するぜ、工藤。」

北原はポンと、新一の肩に手を置いた。

たとえ、幼なじみであったとしても、新一が一人暮らしで食べるものがおろそかになっているからと、理由をつけて弁当を作っていたのは、少なからず新一に対して恋心があるからと思っていた。しかし、新一に対して恋心がないとすると、ただ本当に哀れんでいただけなのか……。複雑な気持ちになる。

「で、これからどうするんだ？ まさか、このまま他の男と付き合っているのを黙って見ているワケにもいかんだろう」

「そうだな……でも、蘭が決めた事ならしょうがないさ。」

「黙って見てるんだな？」

「いや、暖かく見守ってるよ」

「よゆーだな。旦那の貫禄ってやつか？」

「貫禄もなにもないさ。蘭が幸せならそれでいいんだ。」

そう言って新一は弁当箱を開けた。中には新一が好きなダシ巻き卵が入っている。

「そういえば、鈴木と奥さんは？」

「弁当食いに屋上まで行ったんじゃないかねえ？ つもる話もあるみたいだからな」

新一はダシ巻き卵を一つほおばった。

いつもと変わらない、蘭の作るダシ巻き卵の味。シンプルだが、新一が一番好きなもの。一番食べ慣れたもの。しかし、今の新一にはあまり美味しくないように感じた。

「まあ…さ、お前はどうか考えるか知らないけどよ、俺なら、そんなやつやめて俺の所へ来い！って言うかな…？」

新一は顔をあげた。

真剣な表情の北原と目が合う。

「他人の幸せを考えて自分な気持ちを抑えるなんて、それは本当の幸せなんかじゃない。

お前も、そろそろ自分の幸せを考えたらどうだ？」

北原の台詞が新一の心にこだました。

少しだけ、心にかかっていた霧が晴れた様な気がした。

ブー、ブー……

突然新一の胸ポケットに入っている携帯が振動する。新一は素早く取り出し、ディスプレイに映し出した文字を見るなり顔を引き締め、通話ボタンを押した。

「もしもし、工藤です」

普通の高校生から、一瞬で探偵の工藤新一に変わった。

「……分かりました、すぐ行きます」

そう言うなり、新一は再び携帯を胸ポケットにしまうと、机に広げていた弁当を素早く片づけ始めた。結局、食べたのはダシ巻き卵、一つだけ。

「事件か？」

「ああ」

「まったく、いっぱしの高校生なのに、探偵は大変だな？」

北原は皮肉を込める。

「まあな」

担任に伝えておいてくれと、カバンに荷物を突っ込みながら新一は言った。そして、片手に鞆を持ち、もう片方の手で椅子をしようと、すぐに身体の向きを変え教室を出ようとした。

だか、なにかを思ったように、はたと立ち止まる。

「北原っ！ ……サンキュな」

「おうっ！ 頑張っって行って来いよ！！」

新一は教室を後にした。

＊ ＊ ＊

「なるほどね。事情はよく分かったわ」

雲一つない空の下、園子の言葉は透き通るような青に吸い込まれていった。校内のざわめきはここまでは届かず、まるで外界から隔離されたかのように静かだ。校舎の屋上にいるのは、園子と蘭の二人だけで、他に人影は見当たらない。

園子は屋上のフェンスにもたれかかって、蘭の話を聞いていた

「わかったわ、蘭。事情はよくわかった」

「園子に相談なしでごめんね」

蘭は、フェンスを両手でつかみ、すぐ下にあるグラウンドを見下ろして言った。

「謝んなくてもいいよ。安心して、私は蘭の味方だから。」

「園子……」

蘭は隣で空を見上げている園子を見た。

その視線に気付き、園子はニシシと笑った。

「まっかしときなさいよ！ この天下の鈴木園子様に出来ないことはないわ！」

エッヘンと、胸を張る。

「ありがとう園子！」

蘭は園子に抱きついた。

この子が幸せになるんだったら、なんだってやってやるわ！ 園子はそう心に決めた。

ふと、目の端に移る人影が気になって、グラウンドの方に視線を動かした。

「あらあら、やつはまた呼び出しをくらったみたいよ」

「さすが、大馬鹿推理之助、あいつは事件が好きなのよ」

「こんな時に、まったく忙しいやつね」

二人はそっと、校門から出で行く背中を見送った。

柔らかな風が吹く。

第三話（後書き）

ご愛読ありがとうございます！

第三話目でございます。

今回の話は主に、新一とクラスメイトの北原で進んでいます。が、なんか淡々としているというか、話の動きがあまりなくて、きつと物足りなさを感じた読者様が大勢いらっしゃると思います。

んゝ……精進します；

次回もよろしくお願いいたします。

第四話

カタカタカタ……

ここは、外界の明かりが一切届かない地下室。専門書やら、様々な実験器具やら、薬品やらで埋めつくされ、雑然としたこの地下室に、リズム良く叩かれるキーボードの音が響きわたっている。一際明るさを放つディスプレイに照らしだされているのは、一人の女性の繊細な面立ち、ウェーブがかかった赤毛。淡い色の瞳は、難しい数式が次々と打ち込まれていく画面を、せわしく映し出している。

突然、キーボードの音しか聞こえないこの地下室に、それ以外の音がした。パソコンの隣に置いてあった携帯電話が震え、メールの着信を知らせる。

女性はふと、忙しく動かしていた手を止め、携帯電話を手に取り、送信者とその内容に目を通すと、思わず口元を緩めた。

「事は手筈通りすすんでいるのね」

満足そうに微笑む。

そして、送信画面で、返事を素早く打ち、送りかえた。

……で、そろそろ事件は解決したのかしら？

昼間に警視庁に呼び出されて、厄介な事件でないかぎり、彼なら大体夕方位に解決して、帰途に着くはず。手元の時計を見ると、今は夜の7時。

おそろく、そろそろ……

ボタン、というドアの閉まる音が、来客者を知らせた。

「全てが順調ね。私の計画通りよ。あの名探偵さんの困惑した顔が楽しみだわ」

女性はボタンと、手にしていた携帯電話を閉じると、椅子にかけてあった白衣を羽織り、緩んでしまった口元を引き締める。

そして、地下室を出る階段をゆっくりと登っていった。

＊ ＊ ＊

「博士ーっ！ 上がるぞ」

そう言うが早いが、靴を脱ぎ捨て、家の中に入る。

ここは阿笠邸。

荒々しく開けたドアは、後ろで大きな音を立てて閉まった。スリッパは履かずに、ドカドカと、まっすぐにリビングダイニングに向かう。

「おお、新一君、おかえり」

博士は、突然やって来た来客者を、家族のように受け入れた。しかし、新一は挨拶もなしにその横を通り過ぎる。

「今日も事件かの？」

「ああ……」

新一は、そっけない声で言った。

博士は、ズカズカと入って来て、どっかりとソファに体を沈めた新一に、思わず苦笑を漏らした。

難しい顔をしておって……。何か、あったのじゃな？

眉間にシワを寄せ、手を口元に当てている新一を見て、博士はピンときた。

何があったのか、聞き出したい所だが、新一があまりにも不機嫌な様子なので、聞くに聞けない。ここは黙っておくのが先決である。とりあえず、彼は暫く一人にさせてあげて、コーヒーでも入れてこよう……と、博士はキッチンに消えて行った。

博士の足音が遠ざかって行くのを、意識の片隅で聞きながら、新一は溜めていた空気を一気に吐き出した。頭の中を、壊れたレコードのように、繰り返し駆け巡っているのは、今日の学校での出来事。蘭のこと……。

園子から聞いた時は、我が耳を疑った。そんな事、あるはずはないと。

しかし実際、教室の前まで一緒に来た場面を見せ付けられると、これは事実だと信じる他にない。

元に戻ってから3ヶ月。戻ったら言おうと決めていた言葉は、気恥ずかしさと、タイミングに恵まれず、先伸ばしになっている。だから、直ぐに実行に移せなかった俺が悪いのだ。

思いを伝えたところで、それがどうとなる確約はないのだが……。

「……くっそ」

新一はガシガシと頭を掻き、高い天井を仰いだ。後悔ばかりが先走って、何か良い考えの一つも思い浮かんで来ない。右手で顔を被う。

学校にいた時は、冷静な自分で行える事が出来た。しかし……

「こんなことなら、早く言っときゃ良かったぜ……」

「あら、誰に何を言うのかしら？」

「志保!？」

不意に後ろから声がして、新一は驚いて振り返った。

「なによ、あからさまにそんな嫌そうな顔をしなくてもいいじゃない」

瞬間的に顔を引き吊らせた新一をジト目で睨むと、手にしていたコーヒーを「博士が入れてくれた」と差し出し、向かいのソファに座った。

「で、悩み事でもあるのかしら？」

志保は、もう一つ手にしていたコーヒーに口を付ける。気持ちを入れ直して、意地悪そうな目で言った。

「悩み事っていうか……」

「蘭さんの事ね？」

ぶはっ!

ズバリ、新一の悩みの元凶を当てられてしまい、口に含んだコーヒーが勢いよく飛び出した。心を読まれてしまったのか、背中から冷や汗が流れ落ちる。

確かに、蘭の事で悩んではいる。

しかし、志保にそれを知られると非常に厄介な事になってしまう……。学校では平静を装う事が出来た。だがそれは、探偵として日頃から心がけているポーカーフェイスがあったからこそ。だから、内心はかなりショックだったのは言うまでもない。ただでさえ蘭に恋人が出来た事でショックなのに、この状況はさらに泣きたくなってしまう。志保の事だ、きっと悪魔のような笑みを浮かべて、からかってくるだろう。

からかわれるなら、まだいい。

触れられたくない傷にワザと触れられ、傷をさらに広げられる事になるだろう。あの、悪魔の手によって……。

新一は、ちらりと目の前に座っている志保を見た。

志保は、新一が吹き出したせいで水浸しになってしまった床を見て、「汚いわね」と呟いている。

床を掃除しようなどという素振りには、全くないが……。

「ああ、そういえば蘭さんから聞いたんだけど、蘭さん、彼氏が出来たんだって？」

ドキッ!!

新一は心臓が飛び出る位に驚いた。

「な、なんでそれを!?!」

「なんでって、蘭さんから聞いたのよ」

ああ……そういえば、こいつ蘭と仲良かったな。

志保は黒の組織を壊滅させた後、解毒剤を完成させて、新一とともに元の身体に戻った。そして、阿笠博士のところで養女として暮

らして行く事に決め、その流れで蘭や園子と知り合ったのだ。今ではたまに、買い物へ出掛けたり、ご飯を食べにいたりする仲だ。

新一は、ふと自分の運命を呪った。

志保は、勝ち誇ったような顔……いや、面白い玩具を見つけた意地の悪そうな顔で新一を見つめている。新一はその場から逃げ出さなくなった。

「こんばんわー！ 志保ちゃん！ 博士えー！ 新一君いる？」

突然、玄関のドアの開く音がして、外から元気な声がした。そして、パタパタと廊下を早足に歩く音がし、勢い良くリビングダイニングに飛びこんで来た。

茶髪の短い髪に、カチューシャが良く似合う彼女が現れ、新一が頭を抱えたのは言うまでもない。

第四話（後書き）

ご愛読ありがとうございました。

「サイン」第四話はいかがでしたでしょうか？

自分の予定していた以上にストーリーの展開が遅くなってしまい、執筆に四苦八苦はじめています；

一応、あと2話程で完結予定のつもりです。

次話投稿まで時間がかかるかと思いますが、またどうぞよろしくお願ひします。

第五話

「新一君！ 新一君！！」

「二回呼ばなくてもわかる。ついでに、大声じゃなくても聞こえる！」

園子が加わった阿笠邸のダイニングリビングに、あからさまに眉間にシワを寄せた新一が、冷たく言い放った。

「まあ、いいじゃない。彼女の登場で一気に明るい雰囲気になったわ」

だって、どっかの誰かさんが不機嫌なオーラ出しまくりで、居心地悪かったんだもの……ねえ？ と、不適な笑みを浮かべながら、志保が新一に振る。

ねえ？ ……って俺に振るな！言葉には出さないものの、新一の顔が思わず引き吊る。

「ははーん。じゃあ、今日の出来事は、かなり堪えたって事ね」
園子が肘で新一の肩をつつきながらからかう。

「へえー。その時の堪えている工藤君、見たかったわね」

「そうなのよ、志保ちゃん。もう、凄く面白かったんだから！」

「園子……お前なあ」

盛り上がる女二人に、ゲッソリする新一。こうなったら、手も付けられない。新一は自分の運命を呪った。

「でね？ 蘭が彼氏と一緒に教室まで来たのを見た新一君の表情とあったら、もう傑作だったわよ！」

「どんな感じ？」

「なんかねえ、鳩が鉄砲豆くらったような顔っていうの？ マヌケだったわ」

園子はその時の様子を思い出したように、嬉々と笑った。

「へえ、普段は冷静沈着でポーカーフェイスを崩さない彼なのにね」志保がワザとらしく言う。語尾に力が入っていた。横目で新一を捉えたその表情は、まさに優越感に浸っている。

新一は内心舌打ちした。

「そうそう！ 手も震えてたし、眉もピクピクしてたわよ。あれは情けない男の代表よね」

「おいっ園子！ 俺に用事があるんじゃないのか？」

楽しそうにはしゃいでいる園子に、新一が横槍を入れる。そろそろ止めておかないと、更に暴走しかねない。ましてや、志保も居るわけだからその威力は何倍もの破壊力がある。

先日、大阪から遊びに来たあの色黒男が、彼女らの餌食となり、再起不能なまでにいびられていた。その時の事を思い出し、身震いをする。

「ああ、新一君にちょっとした報告があつてね」

園子は用事を思い出したように手を叩いた。

「明日、トロピカルランドにデートしに行くみたいよ」

そう言って園子はウィンクを投げる。

爽やかな風が流れた。

「……って、誰と、誰の！？」

話の流れから、もうすでにその人物が誰であるか、わかっている

が、あえて聞く。

「そりゃあ、もちろん…」

「噂の蘭さんとその彼氏ね」

ガクッ……新一は大きく首をうなだれた。

そんな新一を尻目に、他人の恋愛話で盛り上がる乙女二人。

予想はしていたが、聞きたくなかったその台詞。新一の心に、深く矢が突き刺さった。

「……で、新一君」

園子が新一に向き直り、真面目なトーンでその名を呼んだ。そんな園子の気迫に新一は思わずたじろぐ。

「も・ち・ろ・ん、行くわよね〜？ 放つとけないもんね〜？」

「何で、俺が行かなきゃいけないーんだよ」

予想はしていたが、園子の発言に、新一は不機嫌に呟き、眉を潜めた。

確かに、蘭の一大事であるが、所詮蘭が決めたこと。蘭は、他の男を選んだ。

それが事実だった。だから、納得がいなくても、今はまだ蘭の事が好きでも、もう諦める事になっていた。蘭が幸せになれば、それでいい。

北原に学校でそう言ったら『お前はそれでいいのかよ？』と返されたが……。

俺は蘭を待たせ、泣かせる事しかできなかった男。

それでいいんだ……。

「俺は行かねーぜ」

「なんでよ？ 蘭がどうなってもいいって言うの？ アナタ、あの

子の旦那でしょ？」

行かないという意思表示をした新一に、園子は不満の声を出した。

「あゝ！　どいつもこいつも旦那、旦那ってウゼーんだよ！　俺がいつあいつの旦那になったんだ？　え？　言ってみろよ、ただの幼なじみでしかない俺がっ！」

怒りに任せた怒鳴り声が阿笠邸に響いた。鬼のような形相で、園子を睨み上げる。

「そっ、それは……」

新一の剣幕に、園子は言葉を失った。そして、そのままうつ向く。

「……もういいだろ？　蘭が俺じゃなく、他のやつを選んだんだ。それで蘭が幸せになれるなら、本当にいいんだ。　蘭が、幸せそうに笑ってられるなら、それでいいんだ」

そう、俺はあいつから笑顔を奪った。
だから……。

新一は強く拳を握りしめ、目の前にいる、志保と園子を見据えた。

「あいつに、”おめでとう”って言やらねーとな」

しばし、沈黙が降りた。

「ふっ……工藤君って本当に馬鹿ね」

先に沈黙を破ったのは志保だった。その場の雰囲気似合わない

笑い声を漏らす。

「なんだと？」

新一の視線がきつくなる。

「馬鹿って言ったのよ。 乙女心の分からない、大馬鹿推理之助さん」

「志保っ！ テメエ……！」

「蘭さんの苦勞が手に取るように分かるわ。 貴方、それでも男なの？ 『蘭が決めた事だから』 って言って蘭さんのせいにして、『蘭が幸せになればそれでいい』なんて綺麗事言っちゃって。 挙げ句の果てに、悲劇の主人公演じちゃうなんて。 男として最っ低！」

今にも掴みかからんとする新一に向かって、志保が一気に撒くし立てた。

「蘭さんが今まで、どんな気持ちで待ってたのか、分かってるの？」

「……でも、あいつは他の男を選んだじゃないか」

「そうやってまた、蘭さんのせいにする」

「蘭のせいにしてない！」

「いいえ、してるわ。 まるで、 蘭さんが裏切ったと言っても言うような口ぶりじゃない」

新一は唇を噛んだ。

「それとも、私が原因なのかしらね。 私があんな薬を作ったせいで、貴方の時間を奪ったから？……だとしたら、悪かったわ。」

志保は深々と頭を下げた。 志保の言葉が冷たく心に突き刺さる。 今回の事は志保のせいではない。 ましてや、蘭のせいでもない。

俺は、無意識のうちに他人のせいにしてたんだな……。

新一は息を詰めた。

「じゃあ、どうすればいいんだよ……」

放心したように呟き、天井を仰ぐ。 空のように、天井が果てしな

く高く感じる。

「気持ちを、伝えればいいんじゃないかなあ……」

園子がポツリと言った。

「もう、蘭に彼氏がいたとしても、気持ちを伝えるのはいけない事ではないでしょ？」

「俺の気持ち……？」

新一は天井に向けていた視線を、園子に戻した。

「そうよ！ 新一君のありのままの気持ちを素直に伝えればいいじゃない。駄目でもともとよ」

「本当は、貴方の言葉をずっと待っているかも知れないしね」

新一は目を見開いた。

その瞳に、柔らかに微笑んでいる園子と志保が映る。

——『お前はそれでいいのかよ？』——

北原の声が頭にこだました。

……いいワケねーだろっ！

新一は決心したように立ち上がった。

第六話

——翌日——

普段より早めに起きた新一は、出掛ける支度をしていた。寝癖でボサボサの頭をワックスで丁寧にし、鏡に向かって顔を両手で叩く。

「よしっ！」

身だしなみよし！ 気合いよし！

そして洗面所から、ダイニングリビングに戻り、テーブルに置いてあった小さな箱を持ち上げた。

中身を確認すると、そこには、小さなダイヤモンドを上品にあしらった指輪が一つ。昨日のあの後、園子に『他の男から蘭を奪うなら、プロポーズするくらいじゃないと勝ち目はないわ！』との助言を受け、急いで用意した物だ。

それを一通り眺めると、パタンと蓋を閉め、ポケットの中に突っ込んだ。

そして大きく息を吸い込み、気合いと共に家を出た。

園子の話によると、トロピカルランドには十時に待ち合わせらしい。蘭の性格を考えると、待ち合わせ時刻より最低でも三十分前には到着しているだろう。九時半より前に行けば、蘭と二人っきりで話せる可能性が高い。

いや……別に男がいても構わないが。

俺は、本当にどうにかしてた。

元の体に戻ったら、真っ先に伝えようとしていた気持ちは、気恥ずかしさと、タイミングに恵まれず、今日までずっと言わずじまいだった。小さい体の時に、伝えられないという事がどれだけつらいことか、身に染みてわかったはずなのに。

きつと、安心してしてしまっただ……

元の体だから、いつでも蘭に気持ちを伝えられる。元の体だから、いつでも蘭と同じ目線でいる事ができる。元の体だから、いつでも手を伸ばせば、蘭に触れられる。

そうやって自分を甘やかして、肝心なことを先延ばしにしまっていたんだ。

蘭に彼氏ができたとき、胸が張り裂けそうだった。

なぜ、俺を置いて行ってしまったのかと。なぜ、他の男を選んだのかと。

しかし、今まで俺がぬくぬくと、自分の気持ちを伝えずにいたことが全ての原因なんだ。蘭が他の男に走った原因を作ったのは、他にもない、この俺なんだ。すべて、俺が悪いんだ。

今からでは、もう遅いかもしれない。でも、この気持ちを伝えずに終わるのだけは嫌だ。

このまま終わるわけにはいかないんだ！

新一の足は自然と速足になった。

「蘭っ！」

目的地に着いたところで、入口付近にたたずんでいる蘭を見つけ、新一は叫んだ。そして、弾かれた様に顔を上げる蘭の元に、素早く駆け寄る。

「…っらん！」

ここまで走ってきた為に息が切れ、色々な思いが波のように押し寄せ、なかなか言葉が出ない。両手を膝にあて、肩で息をする。

「遅いわよ」

「え!？」

未だに息の整わない新一は、蘭の声に顔を上げた。目に映ったのは、両手を腰に当て、仁王立ちしている蘭で、棘のある声と裏腹に、柔らかな視線を投げかけていた。

「遅すぎっ! もう、どれだけ待ったと思うの? 待ちくたびれちゃったんだから! 罰として、今日は全部新一の奢りですからね」

蘭が頬をを膨らませる。

「え? それってどう言う……?」

俺を待ってた?

新一は突然の展開に、クエスチョンマークを並べた。

「私にその質問をする前に、言う事あるでしょ?」

状況が完全に読めていない新一に蘭が急かす。

「お、おう」

腑に落ちない点が幾つかあるが、新一は蘭に向きなあった。そして、真っ直ぐにその目を見つめる。

蘭の頬が僅かな赤に染まった。

本当にどれだけ彼女を待たせたのだろう。どれだけ、この綺麗な瞳を悲しい涙で濡らしたのだろう。どれだけこの唇から、嗚咽の声を漏らさせたのだろう。

今、ここで誓おう。

もう二度と、この女性を悲しませないようにと。

そして、必ず幸せにすると。

新一はポケットに入れた小さな箱を、そっと、右手で掴んだ――。

――Fin.

舞台の裏側〜後日談〜

——本当にありがとう。おかげでやっと思いを聴ける事が出来ました。もう、なんて感謝したらいいか……—

志保は右手に持った携帯電話のディスプレイを見ながら目を細める。腰掛けている椅子にゆっくりともたれ掛かり、ギシ…と小さな音が室内に響いた。パソコンやら、実験の資料やらでごった返している机の前。志保は携帯電話から視線をはずし、今度は左手に持っていた一枚の写真に目を落とした。

「幸せそうにしてるじゃない」

眩しい位の笑顔で、こちらに向かって肩を並べてピースをしてる二人。その、男の方に向かって志保は呟きかけた。そして、満足そうに微笑むと、雑然とした机の片隅に、その写真を飾った。

r r r r r—……

突然、右手に持っていた携帯電話が着信を知らせる。ディスプレイに映し出されたその名前を見た志保は、申し訳ななさそうに舌を出す、通話ボタンを押した。

「もしもし」

『よお、計画は上手く行ったか?』

「ええ、大成功だわ」

そう言って志保は口元を緩ませた。

「これも、遠藤君のおかげね」

電話の相手は志保に遠藤と呼ばれた。その遠藤にお礼の言葉を述べる。

『だろ？ でも、あの時はびっくりしたぜ……だって学校の校門を出ようとしたらいきなり話かけてきて、「毛利蘭さんと工藤新一君を知ってる？」って。新手的詐欺なんかかと思ったぜ？』

「別にいいじゃない」

『いや、不審者だろ。それに、その後に言った言葉が「毛利蘭って子と付き合ってくんない」だぜ？ ありえねーだろ』

遠藤の抗議の声に、志保は思わず苦笑をもらす。

数日前、志保は蘭から、新一がなかなか自分の気持ちを言ってくれないのと、相談を受けていた。

元の体に戻ってから、もう三ヶ月。そんなことはとくに済んでいたと思っていた志保は、その相談に驚いた。それとともに、強い憤りを感じた。

蘭さんの思いを知っておきながら……！ 同じ女として許せないわ！

そこからこの計画は立てられたのである。

まずは、帝丹高校に直接出向き、蘭の彼氏と偽れる人物を探した。そこで白羽の矢が立ったのが、今電話している相手の遠藤で、話を持ちかけた時はかなり渋っていたが、あの手この手を使って説得させた。

ちなみに、どんな手を使ったかについては、その被害者である遠藤しか知らない。

とにかく、この遠藤を蘭と対面させ事情を話し、諸事情を納得した上で偽彼氏として数日間過ごしてもらうことにした。

そして、学校で蘭と遠藤が一緒にいるところを新一に目撃させ、

”付き合っている”という噂を流せば、この準備は万端である。

蘭に彼氏ができた事実を知った新一は、必ず博士の家に来るだろうと予想を立て、本人にそれとなく『蘭に告白しろ』と言うことを伝えれば、この計画は成功である。

あとは、本人が勝手に行動を起こしてくれる。

志保の読みは完璧だった。

「あなたには悪いことをしたと思っているわ。でも、本当にありがとう。助かったわ」

『どういたしまして。それじゃあ、もう俺の出番はないよな……』

この後、二、三言葉を交して、どちらからとなく電話を切った。志保はすがすがしい気持ちで携帯電話を机に置くと、先ほど飾ったばかりの写真を眺めた。幸せを凝縮したような笑顔の二人と目が合う。そんな微笑ましい姿をみて、こちらまで自然と顔が綻ぶ。

自分が作ってしまった薬のせいで身体の小さくなってしまった彼それは、本来あるべきの高校生としての時間を奪ってしまった事に等しい。それと同時に、彼と彼女を別つことにもなってしまった。そして、その罪は重く志保の肩にのしかかっていた。

志保はそっと立ち上がり、自室の電気を消すと、小さな呟きと共に、部屋を後にした。

——これで、借りは全部返したわよ……工藤君——

舞台の裏側〜後日談〜（後書き）

ついに書き上げました！

やっと完結しました！

前回の投稿からかなり時間がかかってしまいましたが、どうにか完結までに持ち込むことが出来ました。

良かったです。

それでは、次回作もよろしくお願いします！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6512c/>

サイン

2010年11月18日03時02分発行